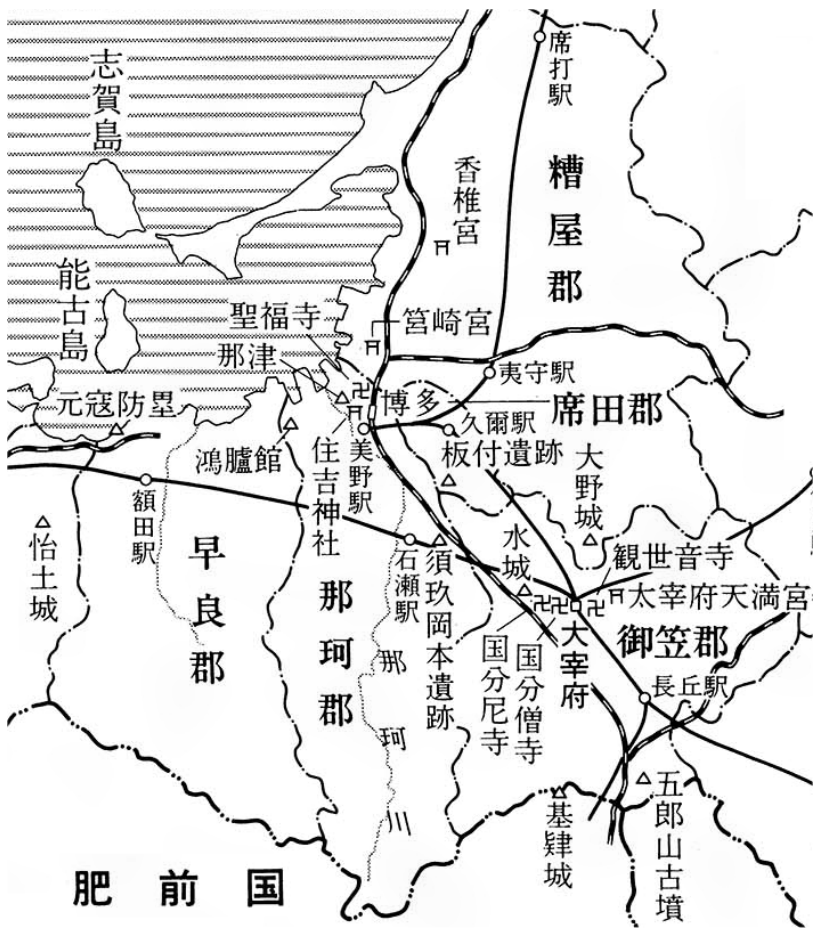


『万葉集』をよむ ～「令和」を入口に～

北川和秀

1. 大宰府とは

- ①九州に置かれた朝廷の出先機関で、「遠とほの朝廷みかど」と呼ばれた。
- ②博多湾から南東に十五キロメートルほど入った内陸に位置し、すぐ北の大野山（現在は四王寺山）には大野城が築かれ、西には水城が築かれていた。
- ③大宰府の役目は、九州諸国の行政の統括、外交、国防。
- ④長官は大宰帥といい、官位相当は従三位。奈良時代には大納言または中納言の兼任が多い。中納言で兼任した場合は現地に赴く。梅花の宴の折の大宰帥は同伴旅人。



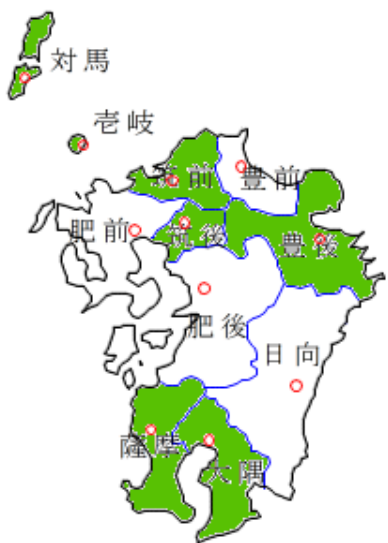
(『国史大辞典』(吉川弘文館)「筑前国」の付図から)

2. 梅花の歌三十二首とは

- ①天平二年正月十三日に同伴旅人邸で催された梅花の宴でよまれた歌。
- ②この日は現代の太陽暦では七三〇年二月八日に当たる。立春の三日後。
- ③参加者は大宰府の役人と九州諸国の役人、合計三十二名で、一人一首ずつの歌が記録されている。

④ 参加者

- ・ 大宰府の官人 17人
- ・ 造筑紫観世音寺別当 1人
- ・ 九州諸国の官人 計11人
 - 筑前国 4人 筑後国 1人
 - 豊後国 1人 大隅国 1人
 - 薩麻国 1人 老岐国 2人
 - 対馬国 1人
- ・ 不明 3人



3. 梅花の歌の序文

○ 本文、訓読文、口語訳は別紙参照。

4. 帰田賦と蘭亭序

① 帰田賦……後漢の官人・文人・科学者である張衡（七八〜一三九年）が作った賦。

『礼記』や『詩経』の影響を強く受けている。永和三年（一三八）の成立か。官職を辞し、田舎の穏やかな自然の中で暮らし、書を読み、文筆に勤しもうという内容。六世紀に編纂された『文選』に収録されている。

② 蘭亭序……東晋の時代、永和九年（三五三）三月三日に、王羲之は名士を蘭亭（浙江省紹興市の南西にあった亭）に招き、四十二名で曲水の宴を開いた。その時に作られた詩二十七編（蘭亭集）の序文として王羲之が書いたもの（草稿）。書の名品として知られる。

③ 蘭亭序と梅花宴序とは趣旨が共通。

・ 永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。（蘭亭序）
（永和九年、歳は癸丑としに在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事けいじを脩をさむるなり。）

・ 天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。（梅花宴序）
（天平二年正月十三日、帥そちの老おきなの宅いへに萃あつまり、宴會うたげを申のぶ。）

④ 蘭亭序と梅花宴序とは字句の似た部分もある。

・ 是日也、天朗氣清、惠風和暢。（是の日、天朗ほがらかに氣清く、惠風けいふう和暢わちやうせり。）

・ 于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑よく風和やはらぐ。）

⑤ 帰田賦と梅花宴序とは字句のよく似た部分がある。

・ 於是、仲春令月、時和氣清。（ここに、仲春の令月にして、時和らぎ氣清し。）

・ 于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑よく風和やはらぐ。）

5. 『万葉集』の梅

① 『万葉集』によまれた植物ベストテン

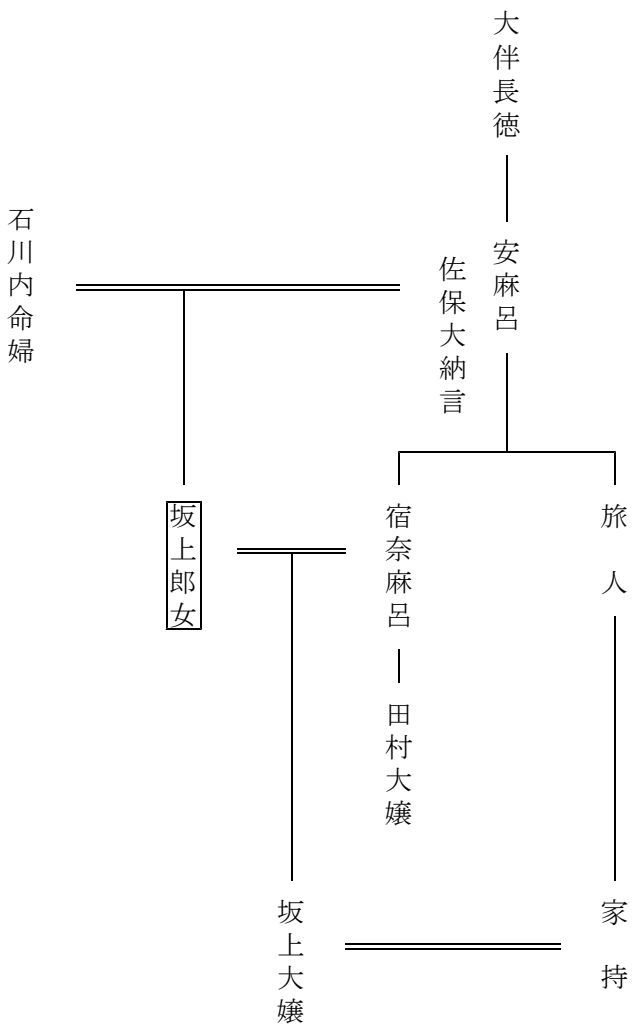
- | | |
|---------------------|-----|
| 1 はぎ(萩) | 一四一 |
| 2 うめ(梅) | 一一六 |
| 3 たちばな・はなたちばな(橘・花橘) | 一〇七 |
| 4 すげ・すが・やますげ(菅・山菅) | 七四 |
| 4 まつ(松) | 七四 |
| 6 あし(葦) | 五五 |
| 7 ち・あさぢ(茅・浅茅) | 五〇 |
| 8 やなぎ・あをやぎ(柳・青柳) | 四九 |
| 9 ふぢ・ふぢなみ(藤・藤波) | 四四 |
| 10 さくら(桜) | 四一 |
- ② 梅は第二位を占め、万葉集に数多くよまれた植物である
- ③ ただし、植えられている場所は、大宰府や平城京の貴族の庭園などに限られている
- ④ 東歌には全くよまれていない
- ⑤ 時代的には奈良時代以降
- ⑥ 花の色が分かる梅は白梅。香りをよんだ歌は極めて少ない
- ⑦ 梅は中国からの渡来植物で、まだ広く普及していたわけではない

6. 後宮十二司

梅花の宴に集ったのは男性のみ。当時、官人は男性に限られていた。女性の官人は後宮十二司で仕事をしている女官たちくらい。

- ① 内侍司(ないしのつかさ) …… 天皇に常侍し、奏請・宣伝に供奉し、女孺を監督。
- ② 蔵司(くらのつかさ) …… 三種の神器・天皇の衣服・皇室の珍宝などの管理。
- ③ 書司(ふみのつかさ) …… 宮中の図書、紙・墨・筆などのこと。
- ④ 薬司(くすりのつかさ) …… 内薬司で作られた薬を天皇や后妃に供する。
- ⑤ 兵司(つわものつかさ) …… 内兵庫にある武器の管理と呈上。
- ⑥ 闍司(みかどのつかさ) …… 宮城・内裏の諸門の鍵の管理とその出納。
- ⑦ 殿司(とのもりのつかさ) …… 輿、髪油、湯浴、灯油、火燭、薪炭の管理・提供。
- ⑧ 掃司(かにもりのつかさ) …… 床や筵を供し、清掃や殿内の設備。
- ⑨ 水司(もいとりのつかさ) …… 粥などを奉る。
- ⑩ 膳司(かしわでのつかさ) …… 天皇の食事のこと。
- ⑪ 酒司(みきのつかさ) …… 酒のこと。
- ⑫ 縫司(ぬいのつかさ) …… 衣服の裁縫、女官の考課。

7. 大伴氏の中の坂上郎女の役割



① 「(天平) 七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願りぐわんが死去みまかれるを悲しび嘆きて作る歌一首 短歌あは并あはせたり」とある歌の左注(三・四六一) 歌は省略

右は、新羅国の尼、名を理願といふ。遠く王徳に感じて聖朝に帰化す。時に大納言大將軍大伴卿(安麻呂)の家に寄住して、既に数紀あまたのとしを逕へたり。ここに天平七年乙亥を以ちて、忽にはかに運病に沈みて、既に泉界に趣おもむく。ここに大家石川命婦、餌薬にやぐの事に依りて有間の温泉に往きて、この喪もに会あはず。ただ、郎女独り留りて屍柩にやぐを葬送すること既に訖をはりぬ。よりてこの歌を作りて温泉に贈り入る。

② 「大伴坂上郎女、跡見庄とみのたどころより、宅いへに留とどまれる女子むすめの大嬢おほいらつめに賜たまふ歌一首」(四・七二三)、「大伴坂上郎女、竹田庄たけだのたどころより女子むすめの大嬢おほいらつめに贈る歌二首」(四・七六〇) という題詞のある歌。 歌は省略

*梅花の宴の歌を意識したとおぼしき大伴坂上郎女の歌(年代不明。冬相聞)
大伴坂上郎女の歌一首

- ・酒坏さかづきに梅の花浮うけ思おもふどち飲のみみての後は散ちりぬともよし(八・一六五六)
- ・盃あわやなぎに梅の花を浮うかべて、氣きの合うもの同士で酒を飲のみんだ後のちなら散ちつても構かまわない
- ・青柳あおやなぎ梅うめとの花を折かり挿頭かざし飲のみみての後は散ちりぬともよし(笠沙弥)と似る。

【子の命名】

- ① 既に児生れて後に、天孫就きて問ひて曰はく、「児の名を何に称けば可けむ」といふ。（日本書紀 神代十の3）
- ② 天皇、其の后に命詔して言らさく、「凡そ、子の名は必ず母名けむを、何とか是の子の御名を称はむ。」とのらす。（古事記 垂仁）

【養蚕】

- ③ たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして（一一・二九九一）

【娘の監督】

- ④ たらちねの母が手放れ斯くばかり為方なき事はいまだ為なくに（一一・二三六八）
柿本人麻呂歌集
- ⑤ たらちねの母に知らえずわが持てる心はよし多君がまにまに（一一・二五三七）
- ⑥ 玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ
（一一・二三六四）古歌集

- ⑦ 汝が母に嘖られ吾は行く青雲のいで来吾妹子逢ひ見て行かむ（一四・三五一九）
未勘国東歌

- ⑧ たらちねの母に障らばいたづらに汝もわれも事成るべしや（一一・二五一七）

- ⑨ たらちねの母に申さな君もわれも逢ふとは無しに年を経ぬべき（一一・二五五七）

- ⑩ かくのみし恋ひば死ぬべみたらちねの母にも告げつ止まず通はせ（一一・二五七〇）

【母への思い】

- ⑪ 家に在りて母がとり見ば慰むる心はあらまし死なば死ぬとも（五・八八九）

山上憶良

- ⑫ 出でて行きし日を数へつつ今日今日と吾を待たすらむ父母らはも（五・八九〇）

山上憶良

- ⑬ 真木柱讃めて造れる殿の如いませ母刀自面変りせず（二〇・四三四二）駿河防人

- ⑭ わが母の袖持ち撫でてわが故に泣きし心を忘らえぬかも（二〇・四三五六）

上総防人

【本文】

梅花 譚卅二首 并序

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅 申宴会也

于時 初春令月 氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

加以

曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋

夕岫結霧 鳥封穀而迷林

庭舞新蝶

空歸故雁

於是

蓋天坐地

促膝飛觴

忘言一室之裏

開衿煙霞之外

淡然自放

快然自得

若非翰苑 何以攄情

詩紀落梅之篇

古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

【訓読文】

梅花の歌三十二首 序を并せたり

天平二年正月十三日、

帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。

梅は鏡前の粉を披き、

蘭は珮後の香を薫らす。

加之、

曙の嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧を結び、鳥は穀に封されて林に迷ふ。

庭には舞ふ新蝶あり、

空には帰る故雁あり。

ここに、

天を蓋とし地を坐とし、

膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、

衿を煙霞の外に開く。

淡然として自ら放にし、

快然として自ら足る。

若し翰苑に非ざれば、何を以てか情を攄べむ。

詩に落梅の篇を紀す。

古今それ何ぞ異ならむ。

宜しく園梅を賦みて、聊かに短詠を成すべし。

【口語訳】

梅花の歌三十二首 序文を加えた

天平二年正月十三日、

大宰帥の老の屋敷に集まって、宴会を開く。

折しも、初春の良い月で、大気は澄んで風は穏やかだ。

梅は、鏡台のおしろいのように白く咲き、

蘭は、玉佩を着けた人とすれ違ったときのように香る。

さらには、

明け方の峰には雲がたなびき、松は薄物を纏って傘を

差し掛けたようであり、

夕方の山の洞からは霧が湧き立ち、鳥は霧の帳に閉じ

込められて林の中を飛び迷う。

庭には春に生まれた蝶が舞い、

空には去年の秋に來た雁が帰ってゆく。

ここに、

天空を傘とし、大地を敷物としてくつろぎ、

膝を寄せ合って、盃を巡らせる。

一堂に会して、内には言葉も不要なほどに打ち解け、

外には良い景色に向かって襟をくつろげる。

心は淡々として自由であり、

気分は快く満ち足りている。

文筆以外の何によつてこの思いを述べ尽くせようか。

昔の中国には落梅の漢詩がある。

昔と今と、中国と日本と、何の違いがあるうか。

さあ、この庭園の梅を短歌によもうではないか。